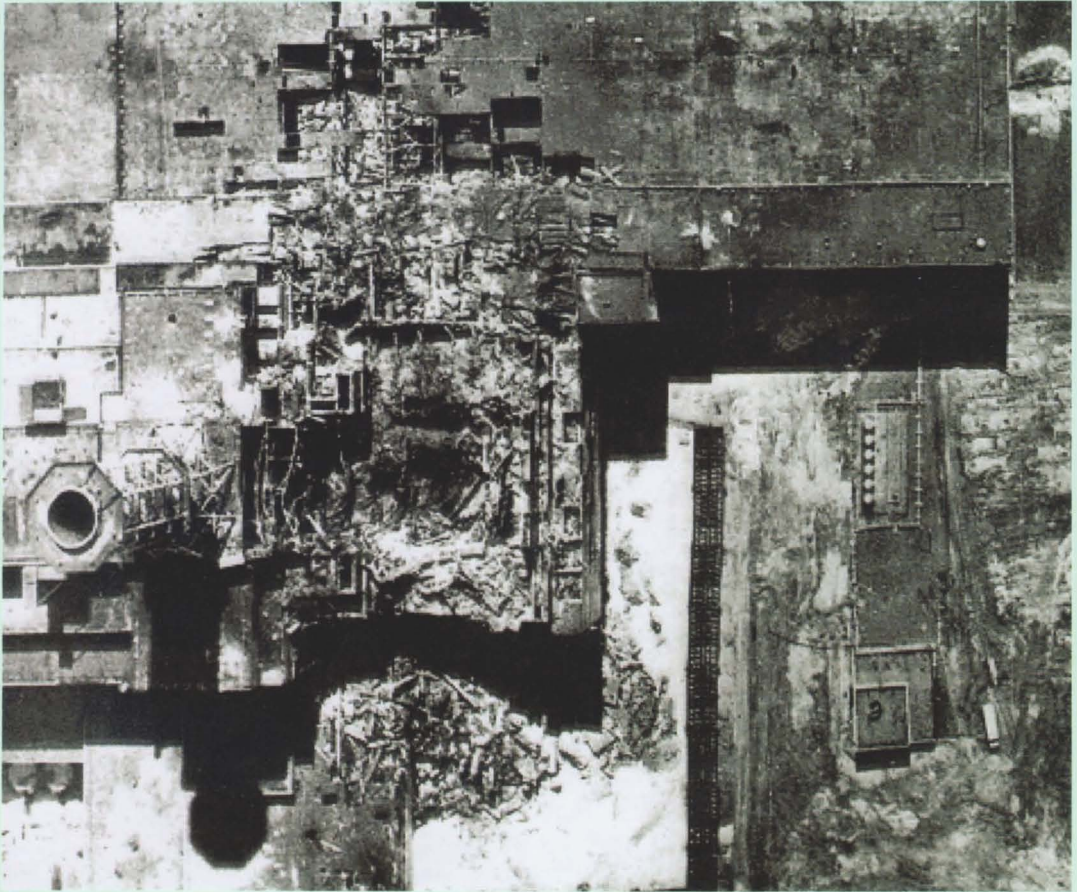


# チェルノブイリ：虚偽と真実



L. A. イリーン著

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

NAGASAKI ASSOCIATION FOR HIBAKUSHAS'

MEDICAL CARE (NASHIM)

# チェルノブイリ：虚偽と真実

L. A. イリーン著

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

NAGASAKI ASSOCIATION FOR HIBAKUSHAS'  
MEDICAL CARE (NASHIM)



## 日本語版の出版によせて

古代ローマの神話に登場する神ヤヌスは二つの顔を持っていた。その一つは過去にそして、もう一つは未来を向いていたという。原子力も、いわば二つの顔を持った現代のヤヌスである。このエネルギーの巨大な力は、人類に悲劇をもたらす可能性と恩恵をもたらす可能性を内乞している。二〇世紀のはじめ、つまり原子力の世紀の幕開に、偉大なるアーネスト・ルーサーフォールドを含む多くの物理学者が、原子物理学の分野における歴史的な発見の実用化の可能性に関して、慎重な態度を示していたのは有名な事実である。この発見の運命について、ロシアの科学者であるウラジミール・ベルナツキーがまさに予言している。彼は、一九二四年に次のように書いている。

「我々人類は、過去のいかなる発見とも比較できないほど大きな社会的変革期を迎えている。人類が原子力エネルギーを利用できるようにする時がすぐそこまで来ている。このエネルギーは、人類の生活をより快適なものにする源となっていくであろう。しかし、人類はこの力を利用し、破壊ではなく繁栄へと導くことができるのであろうか？ 人類は、科学によって与えられたこの力を利用できるほど賢くなったのであろうか？」

五十年以上が過ぎた今も、世界は広島と長崎の原子爆弾の恐怖におののいている。一九四五年の核兵器の残酷な使用と犠牲者の悲劇は、永遠に人類の癒されない傷として残るであろう。しかし、それ以来四十年以上もの間、原子力エネルギーは、人類へも核兵器開発という暴挙の中用いられてきた。特に高度に発達した日本の原子力産業は、このよい見本である。人類と自然環境のために原子力の安全利用を維持していくことは、原子力の進歩と社会への応用のための基本的な条件である。この分野だけでなく、他のいかなる現代の産業技術においても、安全性を無視することは不可能である。

一九八六年四月二十六日未明発生したチェルノブイリ原子力発電所での爆発事故は、設計、建設、設備そして専門的調査を含む原子力発電所の全ての内容における安全の徹底と放射線防護の必要性を軽視することの危険性を見せ付けた悲劇であった。明らかに、チェルノブイリの悲劇は複雑な状況における、いわゆる人的要因の役割の重要性を示した最初の重大事故であった。そして、チェルノブイリ事故後の復旧作業によって得られた経験、事故後に起こった出来事の客観的な分析、そしてその後の結論と勧告は、科学者や専門家の国際的組織や、この問題の客観的な情報に関係した人々のために非常に役立つものとなっている。

原語版は、一九九四年に初版が出版され、さらに一九九六年には第二版が出版された。一九九五年には第一版の英語版が出版されている。今後更にドイツ語、フランス語、中国語そしてアラビア語版など出版される予定である。今回出版される日本語版は、英語版を邦訳した後、ロシア語第二版における変更部分を加筆・訂正したものである。

私にとり旧ソ連邦の放射線医学の邦訳が長崎ヒバクシャ医療国際協会の御支援で出版されることは、誠に名誉なことである。私個人は、長年にわたり放射線医学および放射線防護学の分野において日本の科学者や専門家と共に仕事をこなしたことに、非常に満足し感謝している。すでに本文中でこの点は言及しているが、重ねて日本の友人達に感謝の意を表し序文とさせて頂きたい。

L. A. イリーン

## 卷頭言

恐らく世界の誰もが知らなかったであろうこの田舎町の名前を一躍有名にしたのは、いうまでもなく一九八六年四月二十六日未明に発生したあの原子力発電所事故であった。ウクライナ共和国の片隅にあるチェルノブイリと呼ばれる町の郊外に、同名の原子力発電所が四基稼動しており、その第四号炉が爆発して大量の放射能汚染をひき起こした。

このニュースは世界中を震撼させた。特に、現地に近いヨーロッパ各国では放射能汚染への恐怖から、住民の間にパニックまで起こりかねない状況であった。誰しもが正確な情報の一刻も早い入手を望んだが、当時のソ連はいわゆる鉄のカーテンがまだ厳しく閉ざされていた時代であり、いろいろなルートから伝えられる事故の状況も隔靴搔痒の感が強いものであった。

この当時、ソ連側との唯一のチャンネル役を果たしたのが米国オクシデンタル石油の会長アーマンド・ハマー氏（医師）で、事故後骨髄移植手術のためモスコに駆けつけたカリフォルニア大学ロサンゼルス校のロバート・ゲール博士もハマー氏の世話による。私自身も事故後二か月余を経た一九八六年七月上旬、ハマー氏の提唱で招集されたチェルノブイリ対策国際専門家会議に招待され、広島・長崎の経験に基づく提言を行った。

その後、ソ連政府は八月下旬には事故の全貌や処置をIAEA（国際原子力機関）に報告したのを皮切りに、WHO（世界保健機関）なども含めた国際機関や諸外国、特に日本との間でチェルノブイリ対策に関する協力を推進、発展させていくことになる。一方、このような事故後の経過と軌を一にしたように旧ソ連の国家体制が、ペレストロイカ（経済改革）やグラスノスチ（情報公開）の進展で大変革をきたすことは周知の通りである。

このような政治的、社会的混乱は、事故による健康影響を心配している周辺住民に非常な不安をもたらしたことは事

実のようで、当初は情報不足によるいろいろなデマが横行し、グラスノスチの進行とともに、今度は情報過多の現象が現れたと伝えられた。要するに、専門家だけでなく、政治家やマスコミ関係者などが過小から過大にいたる両極端の間で、各自の評価や推測をばらばらに住民に伝えたため、住民の間に大きな戸惑いが生じたのも無理からぬことであった。これらの情報はマスコミやルポライターと称する人達の報告などを通じてわが国にも伝えられ、真偽が確かめられないままにチェルノブイリ事故の真相として国民の間に定着する傾向がみられた。

前置きが長くなったが、以上は鉄のカーテンの外側にいたわれわれが知り得たチェルノブイリ事故の状況である。事故当時、ソ連政府の中枢にあって事故処理の医学面を直接指揮したのが、ソ連医科学アカデミーの副総裁を務めるレオニード・イリーニン生物物理学研究所長であった。イリーニン所長とは、私がソ連政府の招聘でチェルノブイリ調査に訪れた一九八八年秋にモスコウで面談したのが初対面であったが、彼はその後の政治的、社会的な環境の変化にも拘らずチェルノブイリ問題の指導者としての立場は変わらず、つまりそれだけ彼は今でも研究者としての信頼と尊敬を内外から得ているということであろう。私も、彼とはかなり頻繁に学友としての交流を続けながら今日に至っている。

その彼が著した本書「チェルノブイリ…虚偽と真実」がN A S H I M（長崎・ヒバクシャ医療国際協力会）によって邦訳、出版されることになった。既に述べたように、鉄のカーテンの外側からしか窺い得なかつたチェルノブイリ事故の状況が、その内部から、しかも事故の指導責任者であつた本人の筆で詳細に語られているのである。私個人にとって興味深いことはもちろんであるが、すべての読者にとつても真相を知るといふ点で参考になるのではないかと思う。

今回のチェルノブイリ事故の原因は、旧ソ連が独自に開発した特有の炉型（黒鉛減速軽水冷却沸騰水型）に人為ミスが加わつたためとされているが、ソ連が一九五四年世界に先駆けて商業用原子炉を運転した国であることも忘れてはならない。つまり、パイオニアとしての十字架を背負ってきたということであるが、放射線防護の面でもかなり以前から多くの優れた研究が（極秘裡ながら）行われてきたことを本書から知ることができる。本書の第一部で述べられている

ウラルの事故の詳細も研究者の関心を引く記述である。

本書はチェルノブイリ事故後七年目くらいまでの状況をカバーしているが、もちろんこの時点では事故の全貌はまだ明らかとなっていない。だからといって、事実ではない虚偽の横行を許すべきでないことはもちろんで、この点を本書は厳しく指摘している。なお、私事に関連して恐縮だが、本書で著者イリオン博士が最も頻繁に引用している名前は、ソ連の放射線生物学の指導者で遺伝学者として知られるティモフェイエフ・レソフスキー博士（一九〇〇—一九八一）であるが、ロシア医科学アカデミー放射線医学研究所は彼の生誕九〇年を記念してティモフェイエフ・メダルを創設、放射線影響等の生命科学分野で功績のあった科学者に贈ることにした。一九九四年八月に私はこれを受領したが、このメダルの裏面にはティモフェイエフ博士の言葉「生命科学で重要なことは、本質的なものを非本質的なものから区別することである」が刻まれていた。

最後に、本書の邦訳と出版を快諾された著者レオニード・イリオン博士とこの困難な作業を見事に完成されたNASHIMの関係者各位に深甚の敬意を表して、私の巻頭言としたい。

一九九八年三月

財団法人放射線影響研究所 名誉顧問

重松逸造



# 目次

日本語版の出版によせて

## 巻頭言

### 第一部 チェルノブイリ事故直前のソビエトにおける放射線医学の科学的レベルとその状況

第一章 研究チーム、科学者、そしてその創造的な結びつき……………	1
第二章 放射能に対する市民防護のための科学的研究…真に達成されたものと失われた機会……………	24
第三章 放射性疾患治療の経験（ウラル山脈での事故において）……………	60

### 第二部 チェルノブイリでの日々

第一章 四月二十六日、チェルノブイリの医師たち。四月二十七日、事故の最初の犠牲者が生物物理学研究所病院に到着する。四月二十六日～二十九日、チェルノブイリ発電所で何が起ったのか、また同時にこの事故の規模の調査が開始される……………	70
--	----

第二章	四月二十九日、キエフにて。ウクライナ保健省は、チェルノブイリ発電所についての情報を何も持っていなかった。四月三十日、大災害の中心地。新たな悲劇が起きる可能性があった。……………	90
第三章	五月二日、チェルノブイリにて。リジュコフは事故の規模を掌握し、三〇キロメートルゾーンから住民を避難退去させる指示を出した。五月六日、首相との電話。五月七日、ウクライナの運命が決定された。それからの展開。……………	110
第四章	三〇キロメートルゾーン以遠に住んでいる人々の避難基準としての放射能レベル。チェルノブイリとモスクワは、この問題に対して異なるアプローチをとった。最終的な決定。……………	143
第五章	放射性ヨードからの住民の防護。チェルノブイリの科学者の理想と現実。ミカエル・ゴルバチョフへの接近。アーマンド・ハマーの協力を受けた緊急医療のため資金援助の提案と、ソビエト共産党中央委員会政治局による拒絶。……………	157
第六章	急性放射線障害発生率についての矛盾する証拠と実際の症例数。モスクワの「診断」と、その後。……………	181
第七章	国家と施設は、チェルノブイリ事故の準備ができていたか？ 災害直後の余波の中におけるソビエトのリーダーシップ。ゴルバチョフは、事故十八日後にテレビに出演する。シェルビーナの政府委員会…効率的な動きと遅れる決定。チェルノブイリの秘密のベール…原因と結果。チェルノブイリの教訓。……………	194

## 第二部 除染作業者達のその後

第一章 除染作業者の登録簿を編集することの困難。政府に対する要求。三〇キロメートル

ゾーンで働いた作業者の実際の人数。……………225

第二章 緊急作業者の被曝。爆発時と直後の数カ月間のチェルノブイリ現場での個人の被曝管理。管理されている人々と放射線被曝に関するデータの提供。放射線リスクの高い

集団の推定される大きさ。……………240

第三章 チェルノブイリ緊急作業者の死亡率の相反する推定値。誰が正しいのか？……………260

第四章 緊急作業者の有病率。研究の方法。医学的放射線管理登録に基づく科学的な予測と

結論……………269

第五章 緊急作業者の社会保障。だれを除染作業者とみなすか？ 数万人の偽除染作業者―

チェルノブイリのきびしい歴史の一ページ。除染作業者を監視するプログラムのさらなる改善…国際プロジェクトが必要。……………278

## 第四部 放射線汚染地区の住民の移転方法における科学的推奨と政治的

### 解決

第一章 高い放射線で汚染した地区での住の問題について言及するときに、伴っていないくはならない科学主義。イオン化放射にはしきい値がないという仮説と容認可能な危険

概念。ソ連は、後者の禁止を行った。…………… 302

第二章 一九八八年、放射線防護に関する国家委員会は、放射能汚染地区における生涯放射線被曝限界値を提唱する。…………… 310

第三章 普通の政策と放射能汚染地区の住民の移転の戦略地図を作ることに関する非専門家の役割。科学者は、ミカエル・ゴルバチョフに訴える。この自発的におこったもの結果…………… 323

第四章 住居の安全についての新しく、「より人道的な」基準。政府は、この概念と集団移転を是認する。移転政策の変質は五年後、その原点に帰る。無能な決定の結果。…………… 335

## 第五部 チェルノブイリ事故に対する国際的専門家の評価

第一章 世界保健機関の専門家による結論。旧ソ連邦の共和国の反応…………… 354

第二章 チェルノブイリ国際プロジェクトはどのようにしてきたか。ウィーン会議。二〇〇〇人の専門家の結論と勧告。しかし、彼らは、国際的な核のマフィアの代表者と非難される。…………… 370

第六部 チェルノブイリ事故の放射線の影響に関する、科学的予想と科学もどきの議論。医学的手段の施行を通じての、放射線からの住民の防護。

第一章 放射線に被曝したチェルノブイリ発電所での事故の長期的影響の評価に対する、現在の科学的アプローチ。……………	390
第二章 チェルノブイリの放射線の影響に対する他の解釈。それらに対する日本人専門家のコメントと、ロシア人科学者による未出版の反論。……………	416
第三章 放射線の防護に用いるべきではない方法。医学的要求と商業的興味……………	438
地名一覧・登場人物一覧……………	450
あとがきにかえて……………	461
監修後記……………	464